



**Data**

監督・製作：サム・メン德斯  
 原作：リチャード・イエーツ『レボ  
 リュショナリー・ロード  
 燃え尽きるまで』ヴィレッジ  
 ブックス刊)

出演：レオナルド・ディカプリオ/  
 ケイト・ウィンスレット/キ  
 ャシー・ベイツ/マイケル・  
 シャノン/キャスリン・ハー  
 ン/デヴィッド・ハーパー/  
 ゴエ・カザン

## 👁️👁️ みどころ

レオナルド・ディカプリオとケイト・ウィンスレットの共演は、『タイタニック』(97年)以来11年ぶり。2人の美男美女の成長ぶりをじっくりと！オバマ新政権誕生の54年前、つまり、1955年のアメリカにおける理想的な若夫婦像とは？また、彼らの夢とは？そして、その挫折とは？ケイト・ウィンスレットの夫であるサム・メン德斯監督演出のエッチシーンには「不満あり！」だが、激しい夫婦ゲンカは舞台並みの迫力が。賞取りレースでの健闘を含め、必見の問題提起作！

## 話題がいっぱい！

この映画は、レオナルド・ディカプリオとケイト・ウィンスレットの『タイタニック』以来11年ぶりの共演と、『アメリカン・ビューティー』(99年)でアカデミー賞監督賞等を受賞したサム・メン德斯監督とその妻であるケイト・ウィンスレットの初コラボによって大きな話題を呼んでいる。また、ケイト・ウィンスレットがこの作品に対して単なる主演作以上の思い入れを持っているのは夫サム・メン德斯との初コンビもあるが、それ以上にアメリカの作家リチャード・イエーツの小説に魅せられ、彼女自身が長い時間をかけ映画化に腐心してきたという経緯があるからだ。ケイト・ウィンスレットがホレ込んだ原作が、1961年に出版されたリチャード・イエーツの『レボリュショナリー・ロード 燃え尽きるまで』。

そんな話題いっぱいこの映画はアカデミー賞3部門にノミネートされたうえ、ケイト・ウィンスレットはゴールデン・グローブ賞の最優秀主演女優賞を受賞した。

## おびただしい量の解説や作品評が

本作はこんな超話題作であるため、パンフレットの中には相田冬二、塚田泉、猿渡由紀、能登路雅子、村松潔らの解説がある。また、『キネマ旬報』2月上旬号には、2人のインタビューの他、黒田邦雄と金原由佳の作品評がある（64～71頁参照）、これらはいずれも力作ぞろいので読みごたえがあるから、興味のある方は是非読んでもらいたい。したがって、この映画に関する私の評論は、それらとの重複を極力避けて、ホントに私流の視点のみを・・・。

この映画が描く時代は1955年。舞台はコネチカット州、ニューヨークの郊外にあるレボリュショナリー・ロード。そして主人公は、家から車と列車で事務機器のノックス社に勤めるフランク（レオナルド・ディカプリオ）と、2人の子供を育てながら家庭を守る妻エイプリル（ケイト・ウィンスレット）。

## まずは「Revolutionary Road」と

### 「suburban」「suburbia」の理解から

「Revolutionary Road」とは、直訳すれば革命道路。これはこの映画の主人公フランクとエイプリルが、不動産屋のおばちゃんヘレン（キャシー・ベイツ）の勧めで購入した白い瀟洒なかわいい（と言ってもかなり大きい）芝生付き2階建て一軒家の建つ街路のこと。それにしても、「Revolutionary Road」とはかなり挑発的なネーミングだが、さてそれはなぜ？

次に大切なキーワードが「suburban」ないし「suburbia」、「suburban」は郊外の、という形容詞、郊外居住者という名詞だが、リチャード・イエーツの原作の中にある「insensitive suburban」という言葉では「鈍感な郊外族」という意味で使われている。また「suburbia」も郊外（居住者）いずれにしても「suburban」ないし「suburbia」という「郊外」がこの映画のキーワードだが、さてその意味するものは・・・？

## 2人とも立派な俳優に成長！

「10年ひと昔」というが、肉体的変化が激しい10代から20代にかけての10年間と異なり、20代から30代への10年間は最も精神的变化（人間的成長）が激しい10年間。1974年生まれのリオナルド・ディカプリオも、1975年生まれのケイト・ウィンスレットも共に演技派志向の俳優だが、2人にとって1997年の『タイタニック』での共演が、人生の転機となったのは当然。したがって、その後の10年間で俳優としてどう生きるかが、2人にとって大きなテーマだったはず。その結果が、2人とも自分の道

を歩みながら、着実に実績を積み上げてきたのは立派なもの。

そんな2人が11年ぶりに、ケイト・ウィンスレットがホレ込んだ原作で共演し、しかもそれを演出するのがケイト・ウィンスレットの夫とは何たるめぐり合わせ。『タイタニック』でのジャックとローズも良かったが、これは恋人同士の愛と悲劇を描いたもの。それに対して、この映画では仲睦まじい(?)夫婦役として、俳優としての成長の跡をしっかりと見せつけてくれる。さてその物語は？

## 見どころ その1 - 夫婦ゲンカあれこれ

フランクとエイプリルのパーティー会場での出会い。女優を目指しているエイプリルの美しさと、港湾労働者と名乗るフランクの個性的な魅力に互いに惹かれた2人の結婚。そしてレボリューショナリー・ロードに建つ素敵な新居の購入。映画冒頭に描かれるのは、そんな1955年当時のアメリカの理想的な若夫婦の誕生。ところが、スクリーン上はすぐに転じて、若夫婦の激しい夫婦ゲンカの第一幕が・・・。

とにかく口のたつ嫁さんと口下手な亭主による日本人夫婦のケンカは、しばしば夫の妻に対する暴力という現象になるが、民主主義と女性尊重の国アメリカでは、あくまで言論による夫婦ゲンカがメインで、暴力による「解決」は少ないはず・・・？この映画は夫婦ゲンカのオンパレードだが、そこで展開される第一幕は、市民劇団の主演として登場したエイプリルの公演が見事に失敗したため落ち込んでしまっているエイプリルと、その態度に腹を立てたフランクとの夫婦ゲンカ。

ここでは、まずフランクのエイプリルに対する文句のつけ方が、1月20日のオバマ大統領の就任演説と同じようにきわめて理路整然としていることに感心。それは、「NO1、芝居が散々な結果に終わったのは俺のせいじゃない。NO2、君に女優の才能がないのも俺のせいじゃない。NO3、俺は愚かで、鈍感で、平凡な郊外族の夫という役回りを決して演じないぞ」というもの。日本人妻ならこれだけやり込められたらシュンとなるところだが、それに対してエイプリルは「あなたほど自己欺瞞に満ちた人間はいない」と猛反撃したからすごい。

『タイタニック』から11年ぶりに共演した2人が、これほど激しい夫婦ゲンカをやり合う姿にビックリ！

## 見どころ その2 - 2つのエッチシーン

スケベおやじ的視点からは、この映画の見どころその2は2つのエッチシーン。夫が監督として演出し、妻が女優として夫の目の前で演ずるエッチシーン第1は、エイプリルとその夫フランクとのエッチシーンだが、その舞台はキッチン。ちゃんと夫婦の寝室があるのに、それは一体なぜ？

私が映画評論を書き始めるきっかけになったのは、『イングリッシュ・ペイシエント』(9

6年)を観て感動したことだったが、その映画でのレイフ・ファインズとクリスティン・スコット＝トーマスのエッチシーンは、そりゃ迫力満点、お色気満点だった(『シネマルーム1』2頁参照)。ところが、世界一の美男美女コンビであるレオナルド・ディカプリオとケイト・ウィンスレットがサム・メンデス監督の演出で見せるエッチシーンは、日本的表現で言えば3こすり半。つまり、30秒ももたないで終わりという体たらく。そりゃ、一体なぜ?もっとも、2人ともそれで大満足のようなだから、私が文句をつける筋合いはないのだが・・・。

もう1つのエッチシーンは、なぜか隣人のシェップ・キャンベル(デヴィッド・ハーバー)とエイプリルとのいわゆるカーセックス。なぜ、そんな事態になったの?それがストーリー的には重要だが、スケベおやじ的にはこれも3こすり半でいとも簡単に終わることと、2人の関係がこの1回こっきりで終わるところが面白い。さらにエイプリルは絶対それをフランクに告白しないところが興味深い。これは、30歳の誕生日に同僚のタイプストであるモーリン・グループ(ゾエ・カザン)と浮気したことを自ら告白し、エイプリルの許しを請おうとするフランクの姿と好対照。男と女ってこんなにも精神構造が違っているわけだ。

1960年代後半から70年代の日本映画界を席卷した日活ロマンポルノの色気には遠く及ばない、1955年当時のアメリカにおける2つのエッチシーンだが、さてあなたはそれをどう解釈?

### 見どころ その3 - あの時代の中絶、墮胎模様は?

ブッシュからオバマに大統領が交代したアメリカではさまざまな分野でのCHANGEが宣言されているが、人工妊娠中絶容認へのCHANGEもその1つ。日本は昔から墮胎天国、人工妊娠中絶天国だが、キリスト教下の国がこの問題に厳しかったのは当然。しかして、1955年当時のアメリカは?前述の能登路雅子の「1950年代という時代:アメリカン・ドリーム」の袋小路によれば、「経口避妊薬の使用が一般に認められたのは1960年。人工中絶が全米で合法化されたのは73年であり、数多くの女性が非合法あるいは自宅での密かな中絶行為によって命を落としていた」とのことだ。

レボリューショナリー・ロードの一戸建てに住むフランク、エイプリル夫婦には既に2人の子供がいたが、さてこの2人は望んで生まれてきた子供たち?それとも・・・?リチャード・イエーツの原作はその点の問題提起も鋭いらしいが、映画ではそこは少しあまい。しかし、パリへの移住を決めた後に第3子の妊娠が発覚したことによって、事態は急転換していくことに。

この映画後半の重要な小道具は、医師の力を借りずに自分で墮胎をするためのあるゴム製品。その使い方は私にはよくわからないが、素人の手によるこんな道具での墮胎(人工妊娠中絶?)が大きなリスクを伴うのは当然。ある日エイプリルがそんな小道具を購入し

ていることを発見したフランクは激怒し、エイプリルに対して「一体お前は、何を考えてんねん！」と追及したが・・・。

## 助演男優賞候補のマイケル・シャノンに注目！

ケイト・ウィンスレットはこの映画でゴールデン・グローブ賞の最優秀主演女優賞を獲得したが、アカデミー賞では助演男優賞、美術賞、衣装デザイン賞の3部門にノミネートされただけだから、レオナルド・ディカプリオもケイト・ウィンスレットも残念。そこで注目されるのが、助演男優賞にノミネートされたジョン・ギヴィングスを演じたマイケル・シャノン。

ジョンの母親ヘレンがフランクとエイプリルを「Special」と信じて、レポリューションリー・ロードの家を紹介したのがきっかけとなって始まったのが、フランク、エイプリル夫婦とギヴィングス夫婦の交流。しかし、フランク、エイプリル夫婦が安易に心を病んでいる息子のジョンを両親と共に自宅に招いたところから大混乱が・・・。

ジョンは一見まともだが、フランクとエイプリルとの会話の中で、自分なりに論点を整理しそれを追及していく姿勢を見ると「普通」の目からはやっぱりヘン。しかし面白いのは、フランクとエイプリルのパリへの移住計画に、ギヴィングス夫婦や隣人のキャンベル夫婦もさらにフランクの同僚たちが全く理解を示さなかったのに対し、ただ1人夫婦の決断に共感したのがジョン。

ところがそんなジョンだけに、フランクとエイプリルの都合（思惑？）によって、パリへの移住計画がおジャンになると、それに対するジョンの非難は辛辣。フランクは遂に怒りを爆発させたが、それは実は、ジョンによって痛いところをズバリ突かれたため・・・？

## 2人はSpecial?パリ移住計画は夢の実現?

この映画のテーマは、1955年当時のアメリカの理想的な女性像と理想的な家庭像をイメージしながら、フランク、エイプリル夫婦の実態を描くこと。不動産屋のヘレンがこの若夫婦に対して「あなたたちはSpecialだ」と語るシーンが何度も登場するが、それは2人とも自覚している様子。つまり、フランクもエイプリルも自分たちの才能に自信を持ち、かつそれを信じているから、周りの人たちから見れば理想的な生活を手に入れているにもかかわらず、2人はまだ満足していないわけだ。エイプリルの不満は、家庭を守るだけの生活でホントにいいの？ということ。そしてフランクの不満は、バカな上司とアホな同僚に囲まれてこんなくだらない仕事をしていてホントにいいの？ということ。つまり2人とも、なぜSpecialな私が・・・？なぜSpecialな俺が・・・？と考えているわけだ

そんな2人に転機が訪れるのは、エイプリルの提案したパリへの一家移住計画。それを聞いたフランクはあまりの唐突さにビックリしたが、よく考えてみればこりゃ面白い。こ

れは自分たちにとって理想的な夢の実現だと考え直し、得意気に同僚たちや隣人たちにその計画を話していくフランクの無邪気さが興味深い。しかし、ホントに2人はSpecial?そして、パリ移住計画はホントに夢の実現?

## 決断の正当性は、客観的情勢変化との対応で

この映画の原題は『Revolutionary Road』だが、邦題はそれに『燃え尽きるまで』というサブタイトルがついている。それは一体なぜ?人生は決断の連続だが、その決断が客観的情勢に合致しているか否かが大問題。ちなみに、オバマ新大統領が打ち出した総額8250億ドル(約74兆円)の財政出動を伴うグリーン・ニューディール政策は、1930年代のルーズベルト大統領によるニューディール政策を参考にしたもの。これは世界的金融危機によって失われた景気と雇用を回復するため最も合理的と思われる決断だが、それが正当かどうかは結局歴史が証明するはずだ。

フランクとエイプリルのパリ移住の決断は「あの時点」では正解だったかもしれないが、その直後2つの大きな客観的情勢変化が起きれば、話は別・・・?客観的情勢変化の第1は、エイプリルの思いもかけなかった妊娠。パリではエイプリルがパリの政府機関で秘書として働くことによって高給を得ることが大前提だったから、エイプリルが妊娠して働けなくなればその計画はおジャンに・・・?客観的情勢変化の第2は、ヤケソノ気味にやったフランクの仕事が会社の幹部からえらく評価され、新たに組織されるコンピューターチームでの高収入、高地位が約束されたこと。こうなりゃ、フランクの決断が揺らぐのは当然?またそうなると、フランクとエイプリルの確執が深まるのも当然?

そんなこんな客観的情勢変化の中、映画冒頭でみた激しい夫婦ゲンカの第二幕、第三幕、第四幕が次々と展開されることに・・・。

## 順撮りの効用がはっきりと

あなたは「順撮り」という言葉を知ってる?映画づくりの便利さは、撮影終了後に控える編集(ポスト・プロダクション)作業があるから、どのシーンから撮影してもオーケーだということ。例えば、ラストの主人公死亡のシーンから入るといった映画もザラ・・・?したがって、逆に俳優の時間の拘束や撮影場所の設定、ロケセットの組み方々々をうまく組み合わせながら、最も有効で無駄のない撮影スケジュールを立てることが大切になる。俳優はどんな状況下でも、どんなシーンでも、監督から求められるとおりの演技をするのが商売だから、もちろんそれなりに対応しているが、舞台はナマだから映画のようにいかないのは当然。

しかして、順撮りとは舞台と同じように脚本どおりの順番で撮影していくこと。その効用はナニ?それは俳優が舞台上で演じているのと同じように、ストーリーの流れに沿って自分の気持を役の中に投影しやすくなることだ。ちなみに、1月24日に公開されて大きな

話題を呼んだ『誰も守ってくれない』(08年)が、この順撮りによって撮影されたことを主演の佐藤浩市が語っているが、『レポリューショナルリー・ロード 燃え尽きるまで』もそれと同じように、サム・メンデス監督は順撮りで撮影したらしい。そして、レオナルド・ディカプリオは『キネマ旬報』のインタビューの中でその演出方法を高く評価している。

数カ月の間ずっと脚本どおりにフランク役を演じていく中で、俳優レオナルド・ディカプリオが次第にフランクに同化・一体化していったために本作の名演技が生まれたとなれば、その功績はサム・メンデス監督の演出にあることは明らか。そんな点に注目しながら、フランク役レオナルド・ディカプリオの演技をしっかりと見定めたい。

## こんな、あっと驚く結末になろうとは・・・

フランクとエイプリルの夫婦ゲンカのネタは、パリへの移住計画で2人のベクトルが完全に一致したことによって消滅し、2人の仲は再び改善した。フランクは得意満面の笑顔でその計画を同僚や隣人に話しかけ、エイプリルは引越し準備に大わらわ。しかしそんな中、2つの大きな客観的情勢変化によって2人のベクトルが再びズレ始めたのは当然だ。

その前兆が現れたのは、なぜかイライラし子供たちを怒鳴りつけるエイプリルの姿。そして、なぜエイプリルがそんなにイライラしているのかを全く理解しないフランクの無神経さに、エイプリルはさらにイライラ……。その結果、再びあの論点、この論点での夫婦ゲンカが生まれ始めたのは仕方なし。エイプリルの体調が良くないから、気晴らしをするべく隣人のシェップ、ミリー(キャスリン・ハーン)夫婦と一緒に飲みに行っても、エイプリルはスナリ盛りあがらない様子。そんな中、フランクがシェップの妻ミリーと楽しそうに踊っていると、さらにエイプリルはイライラ。そして、ある事情によってフランクとミリーが先に車で帰った後、なぜかシェップと2人で盛りあがったエイプリルは車の中で自ら求めるかのようなカーセックスに及んだが、こんな女の心理や生理って一体ナニ・・・？

前述のように、これが3こすり半で終わったのはご愛嬌だが、その後エイプリルがフランクと寝室を別にしたのは一体なぜ？フランクはバスルームの棚の中で発見したゴム製品に激怒したが、一体エイプリルは何を考えているの？ここまで2人のベクトルがズレはじめたら、2人の計画と2人の仲はこの先一体どうなるの・・・？こころあたりからはケイト・ウィンスレットの演技は神がかり的になっていくから要注目！しかし、彼女が選んだ決断とは？

こんな、あっと驚く結末になろうとは私は全く予想しなかったが、それはきっとあなたも同じ・・・？さあ、この名作が描くそんなあっと驚く結末は、あなた自身の目でしっかりと。

2009(平成21)年1月29日記